生涯分析談話会の意義



吉　田　秀　幸

筆者はこのたび，第 86 回分析化学討論会（福岡県久留米市）の前日に行われた第 25 回生涯分析談話会に初めて参加する機会を得た．これまで名称のみを知るにとどまっていた本談話会であるが，実際に参加すると，講演そのものに加え，その前後に広がるやり取りや参加者同士の距離の近さに，従来の学会発表や講演会とは異なる特色があることを強く実感した．このような「場」としての一体感こそが，本談話会の本質であると考えられる．

生涯分析談話会は，日本分析化学会第 59 年会（2010 年 9 月）において創設されて以来，本学会の年会や討論会に併設される形で継続的に開催され，学会における特徴的な行事として定着してきた．分析化学分野を長年にわたり牽引してこられた先達の先生方の経験や考え方に直接触れられる機会は限られており，本談話会はそのような貴重な場として重要な役割を担っている．初参加の筆者が抱いた独特の雰囲気も，こうした背景のもとで醸成されてきたものと考えられる．

当日の講演会では，福岡大学名誉学長である山口政俊先生による「薬学領域における分析化学の課題」と題した講演を拝聴した．薬学と分析化学の関係や将来像について，具体的な研究事例を交えて語られた内容は示唆に富むものであり，強い印象を受けた．とりわけ，個々の成果にとどまらず，それらがいかなる問題意識のもとに積み重ねられてきたのかが示されていた点は，初参加の筆者にとって新鮮であった．講演後には活発な質疑応答が続き，多様な視点が自然に交錯しながら議論が広がっていく様子は，本談話会の特徴をよく表しているものと言える．

さらに，そうした議論は講演会の場にとどまらず，講演後に行われた情報交換会においては，研究の話題に加え，これまでの学会活動や研究生活にまつわる具体的な経験談を，多くの先生方からうかがうことができた．そこには論文や公開情報からは得がたい重みがあり，初めて参加した筆者にとって大きな刺激となった．こうした直接的な対話を通じて，知識のみならず，研究に向き合う姿勢そのものが共有されていることを実感した．

わが国はすでに超高齢社会にあるが，分析化学分野に目を向けると，長年にわたり研究と学会を支えてこられた諸先輩方の活力はいささかも衰えず，むしろ一層の深みをもって発揮されているように見受けられる．その姿を間近にした経験は，筆者にとって今後の自身のあり方を考える契機となった．知の継承とは，知識や技術の伝達にとどまらず，研究に向き合う姿勢や問題意識そのものを含むものであることを，本談話会は体感的に示しているのではないだろうか．

以上の経験を踏まえると，生涯分析談話会の価値は，世代や分野の違いを越えて研究者同士が直接対話を重ねる点にあるのではないかと考えられる．分析化学が多様化を続ける今日において，人と人とをつなぐこのような場の意義はむしろ増大している．本談話会が今後もこうした役割を担い続け，分析化学の営みを支える場として発展していくことを期待したい．

〔Yoshida Hideyuki，福岡大学薬学部，日本分析化学会九州支部長〕